

葛野王「遊龍門山」詩考―比較文学的立場から―

加藤 有子

はじめに

本稿では葛野王「遊龍門山」(詩番十一)と紀男人「扈從吉野宮」(詩番七十三)との共通点について論じたい。

葛野王の「遊龍門山」については、稿者が平成二十七年に論文発表した「唐の公主と『懷風藻』」第三節で、葛野王「遊龍門山」が初唐の詩人・上官昭容「遊長寧公主流杯二十五首」詩の影響によって作詩されたことを指摘した(以下「遊長寧公主詩」と略す)。

紀男人の「扈從吉野宮」については、李滿紅氏が平成三十一年一月十二日に上代文学会例会で発表された。李滿紅氏はこの発表では、紀男人「扈從吉野宮」は同じく上官昭容の「遊長寧公主」詩の影響のもとに作詩されたことについて検証された。

これは稿者が従来より続けている唐詩と『懷風藻』詩との

比較研究の調査資料の上でも、かなり以前から類似が検出されてきており、李滿紅氏の指摘によって更にその資料を裏付けられた形となった。

稿者と李滿紅氏とが指摘しているこの上官昭容の詩については、波戸岡旭氏が、昭和五十九年に発表された「『懷風藻』吉野詩の山水観―「智水仁山」の典故を中心に―」において、次のように指摘してされている。

右の初唐詩の中、特に上官儀の孫女にあたる上官婉児(昭容は官名)の詩における仁智の用法は『懷風藻』のそれに酷似している。(中略)『懷風藻』は特に初唐の影を享けたものと言うことができる。

とある。波戸岡氏の論文では論旨が吉野の山水観、「智水仁山」をめぐる表現で一貫しており、上官昭容詩に関しては

右引用部の指摘に留まっているが、これを掘り下げたものが稿者の論文と調査であり、また李滿紅氏の発表であると言える。

また、波戸岡氏の前掲論文の時代にも、すでに『懐風藻』における「山水仁智」周辺の論文は多く発表されてきており、それは近年にも引き継がれている。「山水仁智」に関する考察に関してはそれらの論文に加える資料はない。本稿では上官昭容詩を中心に『懐風藻』詩人達が唐詩をどのように受容していたかを考察してみた。

一、詩題の問題点

まずは、葛野王の「遊龍門山」詩に関して再考したい。拙稿「唐の公主と懐風藻」では、まず、「遊龍門」という詩題が実は中国にあるのだという事を指摘した。時代的に懐風藻成立と同時期とそれ以降の作詩が多い。果たして、葛野王はそれらを周知であったのだろうか。それとも時代の要請による偶然か。まずは、葛野王の詩を引用する。

五言。遊龍門山。一首。

命駕遊山水。長忘冠冕情。安得王喬道。控鶴入蓬瀛。

この詩題において見られる「龍門山」とは、旧大和国吉野郡

のうち、吉野河の北に位置する山地という。古くから龍門山と言われていたらしいが、文献での初出は葛野王の当該詩題においてである。寺もあったという。後代の文献になるが、『扶桑略記』には大宝二年三月に義淵僧正が龍門寺を建立したとある他、諸説残されているが寺は現存しない。また、諸注も「新釈」が「孰れに属するやを知らず」とあるが、「新註」以降はみな吉野の地名であるとす。

この吉野の山を「龍門山」と呼ぶのには、どのような経過があったのであろうか。そもそも、古来から中国の聖獣とされてきた「龍」(りゅう)が、地名にまでなるのはいつ頃なのであろうか。

『古事記』に「龍」(竜)の使用は序文に一例のみである。

「飛鳥清原大宮に大八州を御めたまひし天皇御世暨りて、潜ける竜元¹に体ひ、洩れる雷期に応へき」とある。

次に『日本書紀』には五三例ほど「竜」が用いられる。例えば、神代紀本文には、

豊玉姫、方に産むときに竜に化²為りぬ。

とある。またこれを『日本書紀』一書(第一)では「時に豊玉姫、八尋大熊罥に化³為り、匍匐ひ透蛇⁴ひふ」、また一書(第三)「八尋大罥に化⁵為る」などとしている。『古事記』でも、「八尋わにと化りて、匍匐ひ委蛇⁶ひき」とする部分である。

これらの概念を、漢訳すると「龍」と表現するのだろう。これらにより「龍」(竜)は、古代において一つに「八尋わに」のイメージであったことがわかる。

他の「龍」の例はどうだろうか。「大將軍紀小弓宿禰、竜驤虎視して旁く八維を眺み」(雄略紀九年)、「其の馬、時に濩略にして竜のごとくに翳び」(雄略紀九年)、「良駒を見つ(略) 壯に及びて鴻のごとくに驚り、竜のごとくに翳り」(欽明紀七年)、「大鷦鷯帝の時に、竜馬西に見ゆ」(孝徳紀白雉元年)、「空中に竜に乗れる者有り」(斉明紀元年)、「三百の竜象の大徳等」(持統紀元年)などある。『日本書紀』記述者にとっては、中国の聖獣「龍」の概念はある程度確定していたと思われるが、「龍門」という地名に至るまで浸透していたかは不透明である。

また、『日本書紀』の中で最も多い「龍」(竜)の使用例は、固有名詞である。風神名の「竜田」で三十七例ある。そのほとんどの例は広瀬大忌神と並列で用いられている。また吉野行幸など、吉野に関する記述に続くことも多い。更に人名としては六例ほど見られる。これら固有名詞の場合は「龍」(竜)を「たつ」と訓めるものが多い。

『風土記』には逸文も含めて十例ほど見られる。豊後国・肥前国・常陸国には「竜」は用いられていない。播磨国に「石竜比賣命」「石竜比古命」、出雲国に草木の名で「竜膽」とある。あとは逸文には「竜神」(山城国)・「竜骨」(豊前国)・

「竜宮」(豊後国)とあるが、やや後代のあり方に近い。

『万葉集』の「龍」(竜)の使用例は十七例である。うち九例が「竜田山」「竜田」という地名、四例が人名で用いられている。これらの例は「たつ」と訓む注が多い。訓としては「国見乎為者 国原波 煙立竜」(けぶりたちたつ) (二)も著名である。また「蛟竜取将来」(みづちとりこむ) (三三三三)と訓む例もある。

例外として題詞に「竜門の恩また蓬身の上に厚きことを知りぬ」(八一二)、序に「彫龍の筆海も粲然として看ることを得たり」(三九七三)とある。うち「竜門の恩」の解釈としては、『文選』琴賦を間に考えられている。中国の「龍門」に関しては後述する。

『懷風藻』では序文に「百濟入朝。啓龍編於馬廐」「龍潛王子。翔雲鶴於風筆」とある他、詩中に「啓龍」「龍樓」「龍車」「龍鳳」、後人聯句に「潜龍」、釈弁正伝に「遇李隆基龍潛之日」とある。「潜龍」に関しては別稿にて論じたい。

このように葛野王の時代の「龍」をみてゆくと、『懷風藻』以外の文献では多くが「たつ」と訓まれている。史官などは中国の聖獣「龍」(りゅう)を認識していたと思われるが、一般的に地名として呼ばれるまでに至る過程は明確ではない。

吉野の山系が「龍門山」と呼ばれるようになったのが、本当に葛野王以前の、ずっと古来からであったと考えるべきか疑問が生まれてくる。仮に本稿では、中国の「龍門」という

概念が輸入されてからの命名であったのではないかと仮定してみよう。

小島大系では頭注で「龍門山」は「南に吉野川が流れ、東に吉野離宮があった宮滝がある」とする。稿者が以前、吉野の宮滝遺跡の周辺を散策した際、切り立った岩の下に溪流が流れ、非常に美しい場所と感じた。それに対し、中国の「龍門」も、両岸に絶壁が向き合い、寺が建っているという。実は稿者が吉野の宮滝遺跡の周辺の崖を見た際、これを「龍門」と見たたのではないかと、ふと感じたのである。

また、中国の「龍門」は様々な故事をもつ。禹が啓いたという故事もあるが、最も有名なのは「登龍門」の故事だろう。中国の「龍門」周辺は流れが激しく、魚類はそこから上流には進めず、ひと度登れば龍に変ずる（転じて、そこを越えれば出世する）といったものである。後に進士の試験や声望の高い人物を指すようになる。一番簡易な説明として『藝文類聚』（鱗介部上「龍」）には「符子曰。觀於龍門。有一魚。奮鱗鼓鬣而登乎龍門而為龍」などと見られる。稿者には天武天皇が東宮時代「吉野に之りて、修行佛道せむと請したまふ」（天智紀）十年」という場所も、暗に中国の「龍門」の故事のような印象をもつ場所だと捉えられていたのではないかと。ところで、中国の文献において、「龍門」は多く用いられるが、その中でも著名な例として、晉・庾闡「海賦」では

「昔禹啟龍門。群山既鑿。高明澄氣而清浮」と賦され、周・

王褒・「四瀆祠碑銘」では「靈祠岳立。貝關雲浮。寂寥詭怪。髣髴神遊。（中略）亂流不度。龍門難上」などとある。これ

らから見ると、六朝期にはすでに、「龍門」が非常に清く澄んだ場所であり（海賦）、「神遊」の場所（四瀆祠碑銘）と表現される場所であることがわかる。

また、『南史』陸倕伝には「龍門之遊」という言葉がある。

梁天監初、為右軍安成王主簿、與樂安任昉友、為感知己賦以贈昉、昉因此名以報之。及昉為中丞、簪裾輻湊、預其讌者、殷芸、到溉、劉苞、劉孺、劉顯、劉孝綽及倕而已、號曰龍門之遊。雖貴公子孫不得預也。遷臨川王東曹掾。

ここでは梁の時代のことを書いている。梁の人品の優れた人物達の宴を指して「龍門之遊」と用いるという。

そして、もう一つ『万葉集』に見られる「龍門の恩」（八二二）がある。この解釈は小島憲之氏が『万葉集大成』訓詁篇で『文選』「琴賦」を指摘したこと(9)から、李善注にある「史記曰、龍門有桐樹。高百尺、無枝、堪為琴」とあるのに拠るといのが通説である。伊藤博氏の『万葉集釈注』では「琴賦などに拠って文を操った旅人の風雅の意図を理解した」ということの暗号なのであろうとする。

稿者には、『万葉集』「龍門の恩」は『文選』琴賦の故事の

上に、『南史』にある「龍門之遊」のような交わりも指すのではないかと考える。初唐成立の『南史』は、日本ではかなり受容されていたとみているが、それに関しては別稿にて論じたい。

『南史』や『文選』注は唐に入ってからのものであるが、その頃の文献には、かなり多く「龍門」が登場する。本稿では中でも唐詩に注目してみたい。唐詩の詩題には「龍門」や「遊龍門」など題されている例は多い。

葛野王の時代で見ると、初唐の張九齡の「龍門旬宴得月字韻」や、同じく初唐・宋之問の「龍門應制」が近く、また著名であつたらう。「龍門應制」をあげる。

龍門應制 宋之問

宿雨霽氛埃、流雲度城闕。河堤柳新翠、苑樹花先發。
洛陽花柳此時濃、山水樓臺映幾重。
群公拂霧朝翔鳳、天子乘春幸鑿龍。
鑿龍近出王城外、羽從琳琅擁軒蓋。
雲罕纒臨御水橋、天衣已入香山會。
山壁巔巖斷復連、清流澄澈俯伊川。
雁塔遙遙綠波上、星龕奕奕翠微邊。
層巒舊長千尋木、遠壑初飛百丈泉。
綵仗蜺旌遶香閣、下輦登高望河洛。
東城宮闕擬昭回、南陌溝塍殊綺錯。

林下天香七寶臺、山中春酒萬年杯。
微風一起祥花落、仙樂初鳴瑞鳥來。
鳥來花落紛無已、稱觴獻壽煙霞裏。
歌舞淹留景欲斜、石關猶駐五雲車。
鳥旗翼翼留芳草、龍騎駸駸映晚花。
千乘萬騎鑾輿出、水靜山空嚴警蹕。
郊外喧喧引看人、傾都南望屬車塵。
囂聲引颺聞黃道、佳氣周迴入紫宸。
先王定鼎山河固、寶命乘周萬物新。
吾皇不事瑤池樂、時雨來觀農扈春。

この詩は詩題の「應制」や詩内容に「群公拂霧朝翔鳳、天子乘春幸鑿龍」「吾皇」などあることから、行幸の際に作られた詩であるとわかる。また「吾皇不事瑤池樂」とある。「吾皇」の樂は西王母の庭の「瑤池樂」を問題にしないという。仙境の樂よりもすばらしいと賛美している。ここは仙境として賛美されていない。(後代になるが)この詩について『唐詩記事』に、

武后遊龍門、命群官賦詩。先成者賜以錦袍。左史東方朔詩成、拜賜。坐未安、之問詩成。文理兼美、左右稱善。乃就奪錦袍衣之。

と見られるように、則天武皇の「遊龍門」に陪した際に作られたものとされている。詩中の「吾皇」は則天武后のことであろう。則天武后は中宗を廢して政權を握ったのが六八四年（即位は六九〇年）以降であり、ちょうど持統朝成立（六八六年）の頃である。稿者は以前よりこの則天武后の行幸と持統天皇の吉野行幸を比較できないかと考えるのであるが、資料が少なく、想像の域から出ることができない。それに関しては後考を俟ちたい。

また、次は作詩事情は不明であるが、やはり類似する状況で作られたものと思われる初唐の詩である。⁽¹⁾

奉和春日游龍門應制 武三思

鳳駕臨香地、龍輿上翠微。星宮含雨氣、月殿抱春輝。
碧澗長虹下、雕梁早燕歸。雲疑浮寶蓋、石似拂天衣。
露草侵階長、風花遶席飛。日斜宸賞洽、清吹入重闈。

「龍門」における「遊」を詠んだものである。「應制」とあるので、あるいは宋之問と同じ時に詠まれたか。葛野王と異なって神仙や仙境として詠んではない。

更に、『唐詩記事』によると、龍門北溪に、韋嗣立の山居が在ったとされ、諸公が詩を賦している。『全唐詩』には張説の「奉酬韋祭酒嗣立偶遊龍門北溪忽懷驪山別業呈諸留守之作」の他、韋嗣立の「偶遊龍門北溪忽懷驪山別業因以言志示

弟淑奉呈諸大僚」、魏奉古「奉酬韋祭酒偶遊龍門北溪忽懷驪山別業因以言志示弟淑奉呈諸大僚之作」、これと同題で崔日知と崔泰之の詩などが収められている。

また、更に詩風が陶淵明の流れを汲むと称される韋應物には「遊龍門香山泉」「龍門遊眺」「再遊龍門懷舊侶」と、この他にも「龍門」を詠む詩をいくつか作り、また杜甫の「遊龍門奉先寺」詩もある。

更に、白居易に至っては、『全唐詩』には「龍門」を詠み込んだ詩が二十六首も採られ、他の詩人達より「龍門」への関心を見ることが出来る。白居易の詩題としては「同王十七庶子李六員外鄭二侍御同年四人遊龍門有感而作」「秋日與張賓客舒著作同遊龍門醉中狂歌凡二百三十八字」「龍門送別皇甫澤州赴任草山人南遊」などがある。

このように「遊龍門」の詩題は盛唐と中唐頃により多く、晚唐になると、齊己の「送僧遊龍門香山寺」詩のみしか見いだせない。『懷風藻』成立期ころから少し後頃に集中すると、言って良い。いずれの詩も、そこに寺があったせいだろうか、神仙や仙境として賛美する詩はない。

右に見てきたように、唐詩だけを見ても「龍門」は当時の人々に非常に興味をもたれる対象であったことは事実であり、それに関して多少なりとも日本にも伝わっていただろうし、則天武后の龍門行幸の周辺詩あたりは伝来していたかもしれない。

則天武後の前後の皇帝も「龍門」に行幸した記録が残されているが、同時期、日本でも吉野は類似した位置づけがあったのかもしれない。そして日本では持統朝の成立があった。武後の動向を日本が注目していないはずがない。稿者は武後の頃の「龍門」の宴と葛野王「龍門山」の宴との比較が必要だと考える。

ところが問題点として、これらの「遊龍門」周辺詩の内容から、直接に葛野王詩の内容に近似する要素を見いだせないのである。前掲した宋之問や武三思の應制詩にしても、それ以降の唐詩においても同様である。

これは他の吉野詩を絡ませて考えても変わらない。多く神仙や仙境を詠む吉野詩に対し、則天武後の行幸の際やそれ以降の「遊龍門」詩は神仙や仙境として賛美せず、宋之問の「龍門應制」では仙境の樂（瑤池樂）よりもすばらしいという賛美である。

あくまでも、唐詩の「遊龍門」という詩題は、詩題においてのみの比較対象でしかなく、詩内容に関しては別の要素を考えなければならない。

本稿の冒頭にも書いたが、詩内容に関しては、別の唐詩との影響関係が明確である。次節以降は詩内容に関して論じよう。

本節では、葛野王の詩「遊龍門山」の詩題を考察した。まず、中国の聖獣「龍」の認識が日本上代の文献にどのような

表現されているのかを見たが、論旨から逸れるため概略のみ示した。その上で、葛野王「遊龍門山」の「龍門山」という場所の意味を考えてみた。

中国における「龍門」は様々な故事を持つが、中でも「登龍門」「龍門之遊」などの語で知られる。その上、唐の皇帝が注目される。また、それ以降も中国の「遊龍門」という詩題は少なくない。その流れの中、葛野王「遊龍門山」は何の関連もなく、本當の偶然に生まれたのであろうか。

稿者は「遊龍門山」という詩題は、単に吉野の一地名を意味するだけではなく、背後に中国の思想や政治背景を想起させる、深い意味を持った詩題であると位置づけたい。

二、吉野詩と「遊長寧公主流杯二十五首」

本節では、葛野王「遊龍門山」（詩番一一）と、紀男人の「扈從吉野宮」（詩番七三）の二首の詩と上官昭容「遊長寧公主流杯二十五首」（以下「遊長寧公主詩」と略す）との比較を行いたい。

まず、前節で論じた葛野王「遊龍門山」詩を考えていこう。詩題の「龍門山」は諸注にもある吉野にある山とみて良いだろう。

この吉野は、『懷風藻』中に詩題として十二首（当該詩も

含む）あり、それらは吉野詩と呼ばれる。吉野詩に関する論は多く、その表現が儒教思想的・老荘思想的・神仙思想的、また道教思想的とも言われ、それらは天皇賛美に向かっているという見方が主流である。

また、吉野詩の論としては右以外に、吉野の「南山」として要素をとりあげた論、「柘枝伝」の方向からの論、自然表現を中心に書く論など、多種多様ある。

特に本稿では、それらの中でも、冒頭に引用した波戸岡旭氏の論を受けて、吉野詩における山水観に注目したい。

次に、上官昭容の「遊長寧公主詩」詩群をあげよう。

- 1, 逐仙賞, 展幽情。踰昆閩, 邁蓬瀛。
- 2, 遊魯館, 陟秦臺。汚山壁, 愧瓊叙。
- 3, 檀欒竹影, 颯咽松聲。不煩歌吹, 自足娛情。
- 4, 仰循茅宇, 俯眇喬枝。煙霞問訊, 風月相知。
- 5, 枝條鬱鬱, 文質彬彬。山林作伴, 松桂為鄰。
- 6, 清波洶湧, 碧樹冥蒙。莫怪留步, 因攀桂叢。
- 7, 莫論圓嶠, 休說方壺。何如魯館, 即是仙都。
- 8, 玉環騰遠創, 金埒荷殊榮。弗玩珠璣飾, 仍留仁智情。鑿山便作室, 憑樹即為楹。公輪與班爾, 從此遂輶聲。
- 9, 登山一長望, 正遇九春初。結駟填街術, 闔閭滿邑居。門雪梅先吐, 驚風柳未舒。直愁斜日落, 不畏酒尊虛。
- 10, 霽曉氣清和, 披襟賞薜蘿。玳瑁凝春色, 琉璃漾水波。

- 11, 跛石聊長嘯, 攀松乍短歌。除非物外者, 誰就此經過。暫爾遊山第, 淹留惜未歸。霞窗明月滿, 澗戶白雲飛。書引藤為架, 人將薛作衣。此真攀玩所, 臨睨賞光輝。
- 12, 放曠出煙雲, 蕭條自不群。漱流清意府, 隱几避寬氛。石畫妝苔色, 風梭織水文。山室何為貴, 唯餘蘭桂熏。
- 13, 策杖臨霞岫, 危步下霜蹊。志逐深山靜, 途隨曲澗迷。漸覺心神逸, 俄看雲霧低。莫怪人題樹, 祇為賞幽棲。
- 14, 攀藤招逸客, 偃桂協幽情。水中看樹影, 風裏聽松聲。
- 15, 攜琴待叔夜, 負局訪安期。不應題石壁, 為記賞山時。
- 16, 泉石多仙趣, 巖壑寫奇形。欲知堪悅耳, 唯聽水泠泠。
- 17, 巖壑恣登臨, 瑩日復怡心。風篁類長笛, 流水當鳴琴。
- 18, 懶步天台路, 惟登地肺山。幽巖仙桂滿, 今日恣情攀。
- 19, 暫遊仁智所, 蕭然松桂情。寄言棲遯客, 勿復訪蓬瀛。
- 20, 瀑溜晴疑雨, 叢篁畫似昏。山中真可玩, 暫請報王孫。
- 21, 傍池聊試筆, 倚石旋題詩。豫彈山水調, 終擬從鍾期。
- 22, 橫鋪豹皮褥, 側帶鹿胎巾。借問何為者, 山中有逸人。
- 23, 沁水田園先自多, 齊城樓觀更無過。倩語張騫莫辛苦, 人今從此識天河。
- 24, 參差碧岫聳蓮花, 潺湲綠水瑩金沙。何須遠訪三山路, 人今已到九仙家。
- 25, 憑高瞰險足怡心, 菌閣桃源不暇尋。餘雪依林成玉樹, 殘雲點岫即瑤岑。

これらは多種多様な故事を用いながら長寧公主の邸宅を賛美した詩群と言える。中でも仙人や神仙世界を表現した故事を多く用いている。

それでは、右の詩群を受容した様子がどのように見られるか、確認してみる。まず、葛野王「遊龍門山」と上官昭容「遊長寧公主詩」うち右の一九首目を並記してみよう。

五言。遊龍門山。一首。 葛野王

命駕遊山水。長忘冠冕情。安得王喬道。控鶴入蓬瀛。

遊長寧公主流杯池二十五首 上官昭容

暫遊仁智所、蕭然松桂情。寄言樓遜客、勿復訪蓬瀛。

右を比較すると、一見して構造が近似していることがわかる。類似部分の説明については、拙稿「唐の公主と『懷風藻』」にて既に論じたので、その部分を一部省略して再録する。

第一句目、葛野王の「遊山水」に対し上官昭容の「遊仁智」の（中略）二つは同じ意味を指す。二句目「冠冕情」と「松桂情」は同じく「情」でまとめ、三句目の「王喬」は「王子喬」のことで世を遁れた仙人。「遜客」の「遜」は「遁」に同じ。「隱遁」や「遁世」する客である。類似の意味をもつ。四句目は「入蓬瀛」と「訪蓬

瀛」とはほぼ同じ意味である。

このような類似のあり方は、『懷風藻』には比較的多い。これは拙稿「中国詩の受容―『懷風藻』詩人達の方法―」でも論じたが、『懷風藻』詩には明確に典故があり、その語を使用しながらどう自分の表現に向かってゆくか、を模索している詩が多いのである。

次に、紀男人「扈從吉野宮」と「遊長寧公主詩」の近似について示してみよう。前述したように、これに関しては李滿紅氏が上代文学会の例会で発表された。発表内容の論文化が非常に待たれる。本稿では、稿者の従来の調査作業の結果を踏まえ、かつ李氏の発表を参考にしながらその近似を示してみることとする。

まず、紀男人「扈從吉野宮」と上官昭容「遊長寧公主詩」の該当部分を再録する。

五言。扈從吉野宮。一首。

鳳蓋停南岳。追尋智與仁。嘯谷將孫語。攀藤共許親。峰巖夏景變。泉石秋光新。此地仙靈宅。何須姑射倫。

- 8、 弗玩珠璣飾、仍留仁智情。
- 19、 暫遊仁智所、蕭然松桂情。
- 10、 跂石聊長嘯、攀松乍短歌。

14、攀藤招逸客，偃桂協幽情。

16、泉石多仙趣，巖壑寫奇形。

24、何須遠訪三山路，人今已到九仙家。

右では、先の葛野王「遊龍門山」詩が「遊長寧公主詩」十九首目そのものと似ているのと異なり、「扈從吉野宮」では「遊長寧公主詩」詩群の数首にわたって類似が見られる点が異なる。このように「懷風藻」詩がある詩群の部分部分を参考にする例については、高潤生氏「懷風藻」と中国文学——積弁正「与朝主人」詩考」による解説が早く、稿者も前掲論文で論じた。

紀男人の第二句目「仁與智」に関しては、「遊長寧公主詩」のうち八首目と一九首目に「仁智」とある。『論語』『雍也篇』をもとにした表現である。「仁智」に関する研究に関しては冒頭に示したように非常に多い。それら従来の論文に加えるものはない。論旨の都合上、ここでは詳説しない。

次に「嘯」は『世説新語』『隱逸』に「籍歩兵嘯」や『晉書』『阮籍伝』に「乃登之嘯也」とある、阮籍の故事を元に詠まれた表現である。「嘯」は「懷風藻」中に右詩を含めて五例見られる。そのうち藤原宇合と藤原麻呂の「遊吉野川」に見られる例は後述する。

「攀」は『懷風藻』中に六例あるが「攀藤」の使用例はこれだけである。『全唐詩』中には五例見られ、時代が近いも

のとしては「遊長寧公主詩」の他に王績「黃頰山」「步步攀藤上」もあるが、紀男人「扈從吉野宮」との内容的近似は右の「遊長寧公主詩」が最たるものである。

「泉石」は『懷風藻』中に他に二例ある。藤原麻里の「暮春於弟園池置酒」序に「徒知泉石之樂性」、隱士民黑人「幽棲」に「泉石行行異」がそれである。六朝詩や『全唐詩』には多く用いられている。中でも太宗の「秋日二首」に「泉石且娛心」、姚崇「奉和聖製夏日遊石淙山」に「石泉石鏡恆留月」などある詩が、神仙世界を詠み込んで景を賛美する例であるが、「遊長寧公主詩」ほどの類似は確認できない。

「何須」も中国詩には多く用いられるが、中でも李嶠「上清暉閣遇雪」に「即此神仙對瓊圃，何須轍跡向瑤池」も趣が近い。

「仙靈宅」に対しては「遊長寧公主詩」の「九仙家」に近い。ただし『全唐詩』には「神仙宅」という語が十四例ほどあり、「仙靈宅」という語も唯一、錢起「尋華山雲臺觀道士」「還從岡家來，忽得仙靈宅」に用いられている（「仙靈」のみでは五例あり）。

以上、右で紀男人の「扈從吉野宮」が「遊長寧公主詩」の影響を受けて詠まれた詩であることを確認した。

これによって、吉野詩のうち二首が、確実に「遊長寧公主詩」の影響を受けていることがわかった。他の吉野詩ではどうだろうか。

『懷風藻』中、詩題に「吉野」を含む十二首のうち、「嘯」が三例用いられている。紀男人の「扈從吉野宮」の他に「嘯」と「仁智」を共に用いているのが、

藤原宇合「遊吉野川」「清風入阮嘯。流水韻嵇琴」
藤原麻里「遊吉野川」「縱歌臨水智。長嘯樂山仁」

の二例である。また、右の宇合詩「流水韻嵇琴」に対しては「遊長寧公主詩」に「流水當鳴琴」(一七首目)ともあり、ここにも部分的類似は認めることができよう。更に、

藤原宇合「遊吉野川」「山中明月夜」
藤原麻里詩「遊吉野川」「浪霞賓」(略)「明月照河濱」

に対し「遊長寧公主詩」「霞窗明月滿」(十一首目)と、近い景を表現する。

また藤原宇合が「天高嵯路遠、河廻桃源深」に対し、「遊長寧公主詩」では「倩語張鸞莫辛苦」(二十三首目)、「蘭閣桃源不暇尋」(二十五首目)とある。藤原宇合の「嵯路」に關しては、諸注張鸞の故事を踏まえているとしているが、「遊長寧公主詩」を場の共通認識として考えると、詠まれる景の読解も深まる気がする。

これらを見ていくと、他の吉野詩に見られる「仁」「智」

という語も、『論語』『雍也篇』は前提でありながら、更に「遊長寧公主詩」も参考にして詠まれたのかもれないという推測も生まれる。また、阮籍の「嘯」の故事も同様だろう²²。もちろん、吉野詩十二首を解釈しようとした時、「遊長寧公主詩」のみによって語ることはできない。しかし、右記の四首の類似はどうして生まれたのか。

日本人が漢詩を詠む、困難であつたらう。その際の参考書として『文選』もあつたらうし、リアルタイムの唐詩、その当時における最新の漢詩も用いていたと考える。例えば現在『翰林学士集』と呼ばれている詩群などもその一つかもしれないし、かつて拙稿でとりあげた高氏の宴詩群であつたり、金城公主や長寧公主などの唐の皇帝の周辺人物の詩群であつたりしたと考えている。

ここで藤原宇合と藤原萬里が共通した教材に学んだということは想像しやすいが、同時に葛野王や紀男人なども同教材を用いていたと言える。

本節では、葛野王「遊龍門山」と、紀男人の「扈從吉野宮」の二首の詩、補足的に藤原宇合と藤原萬里の「遊吉野川」の吉野詩四首と、上官昭容「遊長寧公主流杯二十五首」との比較を行った。それによって右の四首が「遊長寧公主詩」からの影響を指摘できた。

稿者が従来より指摘しているように、また高潤生氏の論にもあるように、『懷風藻』詩人達は初唐から盛唐にかけての

詩を、詩群としてまとめて見ることができた。それはかなり同時代に近いものと言えるかもしれない。そして、その詩群の要素を自分の詩に取り込み、自分の表現を作り上げていったのである。

おわりに

『懷風藻』詩人達にとって、唐詩はどのように受け止められていたのであろうか。意外に『懷風藻』の注釈書類はこの点に関しての言及が少ない。そこに焦点をあてたのが今回の論文である。

第一節では、葛野王詩の「遊龍門山」という詩題と唐詩の「遊龍門」詩の詩題との関連を考えた。葛野王の「龍門山」とは、旧説通り吉野の山でよいだろう。しかしそこが「龍門山」と呼ばれるに至った経緯を、仮に中国の「龍門」を前提に考えてみた。「龍門」とは、皇帝と群臣が行幸し、詩宴も行われる場所であった。吉野もそのような印象の場であったろう。中でも稿者は則天武后の行幸との影響を考えているが、資料は少なく、後考を俟つしかない。

第二節では、「遊龍門山」を含む吉野詩四首と上官昭容「遊長寧公主流杯二十五首」との比較を行った。稿者はそこに唐詩の詩群を受容し、それを自分の表現にしてゆく過程を見る。本来なら更に個々の詩に詳細な資料の提示が必要であ

るが、論旨を優先したため、概略的なものになってしまった点が反省される。今後の課題としたい。

『懷風藻』詩人達は、これまで想像されてきた以上に唐の文化を意識し、そこから学んでいたと考える。

※本稿にあげ、また参考にした諸注とその略称は以下の通りである。

- ・ 釈清譚『懷風藻新釈』（丙午出版社）…… 釋清譚『新釈』
 - ・ 林古溪『懷風藻新註』（バルトス社）…… 林『新註』
 - ・ 杉本行夫『懷風藻』（弘文堂）…… 杉本『懷風藻』
 - ・ 小島憲之『懷風藻（下略）』（岩波書店）…… 小島大系
 - ・ 江口孝夫『懷風藻』（講談社）…… 江口『懷風藻』
 - ・ 辰巳正明『懷風藻全注釈』（立間書院）…… 辰巳『全注釈』
 - ・ 土佐朋子『懷風藻箋註 本文と研究』（汲古出版）『箋註』
- これらの引用に関しては、各々に注は施さなかった。

※『懷風藻』は古典文学大系（岩波書店）、『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』は全て新編日本文学全集（小学館）の本文を用いた。『懷風藻』の詩番は全て大系本に拠った。

※『藝文類聚』は中文出版、『南史』『文選』『全唐詩』はみな中華書局本を、『唐詩紀事』は上海戸籍出版社を用いた。

※本稿では台湾の「新漢籍全文資料庫」と「寒泉古典文献全文檢索資料庫」の檢索結果を参考にした。また、「古籍全文檢索資料叢書」の『先秦漢魏晉南北朝詩』『全上古三代秦漢三國朝文』『全唐詩』『全唐文』の檢索結果も参考にした。

〔注〕

- (1) 拙稿「唐の公主と『懷風藻』」『日本文学研究』五十四号(二〇一六年)
- (2) 波戸岡旭『懷風藻』吉野詩の山水観―「智水仁山」―の典故を中心に―『国学院雜誌』第七九卷四号(一九八四年)
- (3) 波戸岡の注(2)の論の他、代表的なものとして、前田幸雄(一九六九年)・山谷紀子氏(二〇〇八年)などの論がある
- (4) 角川文化振興財団編『古代地名大辞典』(角川書店)
- (5) 黒板勝美編・国史大系『扶桑略記 帝王編年記』(吉川弘文館)
- (6) 小島憲之「萬葉語の解釋と出典の問題」『万葉集大成』訓詁篇(平凡社)
- (7) 孟慶遠主編『中国歴史文化事典』(新潮社)
- (8) 諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館書店)
- (9) 注(6)に同じ
- (10) 伊藤博『万葉集釈注』三(集英社)
- (11) 時代的にここに李嶠「清明日龍門遊泛」詩もあるが、論旨の都合上引用しなかった
- (12) 『旧唐書』には太宗・中宗・則天武后・玄宗などの皇帝の行幸が残る
- (13) 波戸岡の注(1)論の他、月野文子(一九八四年)・田中淳一(一九九八年)・太田義之(一九九九年)・善養寺淳一(二〇一六年)など
- (14) 井実充史『懷風藻』吉野詩について『福島大学教育学部論集』第六十五号(一九九八年)に詳しい
- (15) 代表的なものでは中西進(年)・高兵兵(二〇一二年)・上

野誠(二〇一七)などの論がある

- (16) 小島憲之(一九五四)・中西進(一九六一年)などの論をはじめとして、『万葉集』の柘枝歌とのからみからも多数ある。ここでは詳細を省く
- (17) 吉野詩に限定すると、沖光正(一九八一年)や辰巳正明編『懷風藻―日本の自然観はどのように成立したか―』(笠間書院)(二〇〇八年)に所収の諸論などが詳しい
- (18) 注(2)に同じ
- (19) 注(1)に同じ
- (20) 拙稿「中国詩の受容―『懷風藻』詩人達の方法―」『懷風藻研究』第六号(日中比較文学研究会)(二〇〇〇年)
- (21) 高潤生『懷風藻』と中国文学―釈弁正「与朝主人」詩考』『皇学館論叢』第二十七号五卷(一九九四年)
- (22) 「嘯」に関しては、増尾伸一郎「清風、阮嘯に入る―『懷風藻』の詩宴における阮籍の位相―」『懷風藻―漢字文化圏の中の日本古代漢詩―』(笠間書院)(二〇〇〇年)に詳しい